

招く通信

招く通信

2021年11月号(年2回発行) 発行 社会福祉法人拓く 法人本部 〒830-0071 福岡県久留米市安武町武島468-12 TEL 0942-2712039

出会いの場
ポレポレ
開設20周年
記念号

心を寄せ合い、未来に備える。
「見えない財産」づくりを
多くの人たちと共に。



出会いの場ポレポレ
20歳の誕生日会
オンライン開催!

❖ 理事長メッセージ ❷ 社会福祉法人拓く 理事長 馬場 篤子

2021年9月1日、「出会いの場ポレポレ」は開設20周年の記念日でした。思い起こせば、10周年の際は市長を始め、国、県、市議員等のご列席を得て、参加者500人規模で記念セレモニーを開催。しかし、福祉サービス整備が加速する中で、内心は法人設立前から運動を共にしてきた保護者や職員との心の距離が離れていき、信頼関係という「財産」を失うのではと不安を抱えていました。

いずれサービスでは対応できない時代がやって来る、備えなければ。そう考えて地域とつながる方向に第1の舵を取り、「地域食堂」を始めました。2011年の東北大震災以降は、支援活動で被災地に通ううちに、平時からの支え合いや地域振興の重要性を痛感。「住民による移動支援」「安武そら豆復興作戦」等による実践を積み重ねました。その成果は厚労省に評価され、2017年から3年間、「民間活力を活用した社会的事業の開発・普及のための環境整備事業」を受託、官僚や有識者の方々と企画を推進するチャンスを得て、新たな「地域自治」の姿を模索しつづけています。

そして、人生100年時代。当たり前だった「教育・仕事・引退」という人生設計は描きにくくなっています。お金・住居等の有形財産以上に備えるべきは、「見えない財産」。例えば、「生きる力」や「健康」「人間関係」「ワクワクドキドキ感」等です。そこで、多様な人たちと多様なカタチでつながろうと第2の舵取りに挑んでいます。今年7月、発起人となって旗を振り、「ぶらっとどっと」を設立。「ほんによかね会」に続いての一般社団法人、2つ目の始動です。共に幅広い年代・職種の方々が集い、人が人を呼び込んで新たな担い手が生まれ、久留米の街中を元気にしています。

法人内でも、次代を担う職員がますます地域に飛び出し、力を付けています。周年事業の「20歳の誕生日会」「記念旅行」「第20回ポレポレ祭り」において、一歩も二歩も踏み込んだ取り組みは力強いものでした。目標は「見えない財産」づくり。多くの人たちと心を寄せ合い進めていきたいと思っています。

(写真) 4事業所6カ所をつなぎました。Webカメラに向かい、「ポレポレ20歳の誕生日おめでとう。乾杯!」。(記事は4頁に掲載)

- ❖ CONTENTS ● 「そなえるくるめ」発信… 2 ● 特別寄稿 島崎 春樹氏… 3 ● 20歳の誕生日会… 4 ● 夢工房 新しいカタチ… 5 ● (一社)「ぶらっとどっと」誕生… 6 ● (一社)「ほんによかね会」… 7 ● 第20回 ポレポレ祭り 報告… 8



報告 11月7日、「第20回ポレポレ祭り」 “まち”をつなぐ、初めてのオンライン開催。

今回のポレポレ祭りは初のオンライン開催となりました。当日は約1400人の方にご視聴いただき、温かいコメントも寄せられるなど反響を呼んで、実行委員にとって達成感のある祭りとなりました。オンライン開催って何? どうするの? みんな不安だらけのスタート。「演奏、歌、子どもたち一人一人を輝かせるには」「このアプリで簡単に動画編集できるよ」など、たくさんの人の知恵を持ち寄り、1つ1つやり方を勉強しながら、慣れないパソコンやスマホを駆使して準備を進めました。

当日はYouTubeでの映像配信です。テレビ番組のように事前に取組みを録画して魅力が伝わりやすいように編集したり、ライブ中継で会場の雰囲気や伝えたりと、それぞれ創意工夫を行いました。その積み上げもあり、エンターテインメント性のある「魅せる」オンライン配信ができたのではないかと感じています。ダンスなど出し物の撮影では各会場で分散しながら準備段階から多くの人たちのリアルな関わりが生まれました。「面白かった! やってよかった」「久しぶりに会えてうれしかった」など心から祭りを行ってよかったと思える瞬間がたくさんありました。エンターテ

インメントには人や“まち”をつなぐ力があると実感し、改めてポレポレ祭りの意義を感じました。この祭りを通じて、知恵を出し合い、気かけ合い、声をかけ合い、一緒に汗を流して力を合わせるなど心に「合う」をたくさん重ねることで、未知の試みも成し遂げられるのだと実感しました。だからこそ、日常から「心を寄せあう関係」をつくっておくことが「未来のそなえ」になるのだと思います。第21回ポレポレ祭りに向け、新たに心を寄せ合いながら来年の開催に向けて歩いていきたいと思っています。



2022年11月「夢気球コンサート」を開催予定

社会福祉法人拓く 1970年代より久留米市で展開した障がい児の保護者と教員による統合教育運動が原点。2000年10月法人設立。障がい者が重くても誰もが地域で暮らすために「コミュニティづくり」に取り組んでいます。

事業所 出会いの場ポレポレ・夢工房・グループホーム・居宅介護支援センター
出会いの場Leo・相談支援センターカリブ・久留米市西部障害者基幹相談支援センター



活動を更新中!

コロナ禍を契機として、 「自主防災力」を積み重ねる ウェブサイト「そなえるくるめ」、発信!



今年4月下旬、コロナ第3波の中、
当法人の事業所で、利用者・職員4名の陽性者が発生。
日頃から感染症対策の知識を蓄えていたために速やかに対応できました。

今後の「もしも」に備えて、有志市民の皆さんと
調査研修、情報発信、ネットワーク作りを始めています。

統括本部長 北岡 さとみ

今回、陽性者が判明した際、大きな混乱もなく対応できたのは、「もしも」のときに対応できるよう備えていたからだと思います。私たち法人は、昨年からの感染症対策の研修を実施し、防護服の着脱や消毒の仕方、ゾーニングの方法を学び、実際に陽性者が発生した事業所の体験談では精神面での支えが重要であることを知りました。また、日頃から利用者や職員の体調不良や感染拡大地域への移動などが生じた場合には抗原定量検査を実施するという仕組みを作り、ノウハウも積み上げていたのです。

障がいのある人が感染した場合は、入院もホテル療養も困難な状況が生じる場合があります。自宅でご家族が看るとしても感染予防グッズの十分な備えがあるとは限りません。今回の陽性者発生では、すぐに必要な物を自宅に届けたのですが、ご家族は予防策が分からないまま不安を抱えて過ぎておられたのです。その姿に接したとき、私たちはその不安に寄り添う必要があると痛感。同時に、もしものときに誰かに教えてもらえて、気にかけてもらえたら安心して心強いのではと考えました。

そこで6月、市内の個人事業者や(一社)ぶらっとどっと、「本業+α」、久留米大学教員や学生など市民有志の運営によるウェブサイト「そなえるくるめ」を開設しました。陽性者、濃厚接触者の聞き取り調査による体験談を掲載。また防護服、消毒液、マスクなどを揃えた感染防止グッズ一式を20数ヶ所の事業所に設置し、「困っています、の一声で届けますよ」と発信しています。私たちは、コロナ禍を契機として「備え」の大切さを痛感しました。そして、人を助けようと行動を起こすには、物品のみならず何かしなければと自分たちの心を奮い立たせる「勇気」も必要だと思い知りました。今回、グッズ設置に応じてくださった20数ヶ所の拠点は、勇気ある事業所の皆さんです。市民で立ち上げた新チームとして拠点を増やしながら、「自主防災力」を積み重ねていきたいと思っています。

- ①…6頁に掲載
- ②…本業(商売)を営みながら、お客様にとって「+α」の何が必要かを考え、一歩踏み込んだプラスのアクションを行うお店。

<https://www.sonakuru.org/>



当法人は事務局です。



当法人では、抗原定量検査やPCR検査を定期的に実施しています。



困ったときは、
私たちが力になります!



2001年「出会いの場ポレポレ」開所の3ヶ月後、島崎氏が(左から2人目)お祝いに来られました。そして、「ポレポレ」2階の座敷に泊まってみたいと。その後、由布市にご案内しました。当時の理事、國友淑子、櫻木京子、馬場篤子と一緒に。

特別寄稿

共に生きる場づくりを手伝って

名古屋 あさみどりの会 島崎 春樹

昭和9年2月生まれ。1985年より愛知県知的障害者福祉協会(当時は愛知県精神薄弱者愛護協会)会長就任。以後30年、グループホーム作りと普及に取り組まれました。

私が初めて久留米にお邪魔したのは1998年5月、「共に生きる場を拓く会」に呼ばれて、旧久留米養護学校で講演させて頂いた時です。教師と障がい児の親と一緒に、真剣に取り組んで居られる姿に、一瞬、私もその仲間のような気分になっていたことを覚えています。

私共の法人も数人の教師らと障がい児の親たちの出会いから始まり、市民有志の協力を得て、任意の福祉運動団体として15年の活動を経て法人化しております。私は皆さんの運動に共感し親しみを感じたのだと思います。

私は障がい福祉の世界に来てからの40年は、「障がい者の人間らしい幸せな人生創造」をテーマに活動してきました。その中で100年続いた入所施設主流の制度で、この人たちの人間らしい人生への見通しが立たなかった時代に、グループホームの制度化は画期的でした。

その頃名古屋市から施設建設を依頼され、「地域移行を前提とした宿泊訓練型入所施設」である事を条件に、30人定員で作成し、その受け皿として親たちと一緒にグループホーム作りに取り組んでいました。そこへ久留米の皆さんが何回も見学に来られ、その行動力と学ぶ意欲に引き込まれ、これは応援しなければと思いました。

従って馬場さんから突然施設の設計を頼まれた時、私の経験が役に立てるなら引き受けていました。現地も見ないで、FAXで送られてきた簡単な土地の構図を元

に画いたのですが、馬場さんからの多彩な注文を限られた面積に詰め込んだので、たまり場のスペースも一角に組み込みたと思った事務所が狭くなり、心残りのままFAXしました。それを設計士が図面にされたのを受け取り、訂正して又FAXする…。を繰り返して後、「ポレポレ」の建物が出来ました。グループホーム「チェムチェム」の設計も現地を見ないまま画きました。次の「ニュンバ」は現地を見て、「三原さんち」の改修は図面がないので、建物全体をメジャーで測って、夜ホテルで図面を画きました。その後も次々グループホームの改修は続き、私はいつの間にかポレポレの一員として動いていました。

あれから20年、ポレポレはその後たびたび変っていく制度を道具として見事に使いこなして、先駆的に実践し、私の予想をはるかに越えた発展を遂げられました。そしてこれまでの「福祉」の概念の枠を越えて、街の中で「お惣菜屋さん」「地域食堂」「カフェ」「森づくり」などなど、地域で「人と人がつながる」多彩な活動を展開してこられた実践には、本当の「人間福祉」のあり方を示唆されるものがあります。

これからもさまざまな社会活動を通して、障がい者も老人も子どもも含めて混じり合う中で、学び合いが起こり、援け合いが起こり、「共に生きる社会創り」のパイオニアとして発信していかれることを期待しています。



初代理事長のお宅へ、パンをお届けに。無認可時代からお世話になっていた江田さんと竹浪さんが届けました。

元祖パン職人の安倍さんと協力してパン作りをしている豊崎さん、高田さん。

当時看板娘の上村さんと豊崎さん。思いを込めてパン作りです。

事業所ごとに壁飾りや「誕生ケーキ」の飾り付けをしました。

記念品「ポレポレパン」表書き。20年前に開設案内状を書いてくださった田中紀美弥さんの絵、今回も当時と同じ色合い、タッチです。

出会いの場ポレポレ 「20歳の誕生日会」を開きました。 私たちの原点。心から話ができる関係性を築く。

今年の9月1日は20周年を迎える特別な日でした。

緊急事態宣言の下、各事業所をつないでのオンライン誕生会。

職員総出で事前準備から本番当日、挨拶回りをする中で、開設時の原点に立ち戻り、取り組みを見つめ直しました。

出会いの場ポレポレ 係長 野瀬 美紀

「ポレポレのパンです。誕生会の記念品です」
「届けてくれたの？思い出すわ。ポレポレのあんパン、氷砂糖を使ったあんだから、おいしかったもんね」
法人を支えてこられた皆さんの懐かしそうな笑顔に、こちらもにっこり。感謝を伝えたい。私たちは誕生会終了後、利用者と手作りしたパンを届けたくて一軒一軒訪問しました。パン工房はポレポレ開設と同時に店開き。仕込みや片づけ、販売は保護者、教員の方々の協力を得ながら追われる日々でしたが、活気にあふれていました。
誕生会の日は、誕生ケーキ作りや秘蔵の写真と映像で歩みを振り返る企画を実施しました。理事長や職員の若い頃の写真を見せて、「これは誰かな？」と笑いあり、一昔前は保護者と密接な関わりがあったなと感慨もあり。たこ焼き販売をしながら、たわい無い会話や家庭訪問などで徐々に信頼関係を築いたこと、利用者の自宅に

他の子どもらが泊まるホームステイ、ポレポレの2階に布団を敷いて雑魚寝をしたショートステイ、利用者の兄弟姉妹やボランティアが大勢参加した「佐賀県波戸岬少年自然の家」のキャンプ。そして、開設から数年は利用者めいめいが役割を持ち、笑顔で過ごせるような環境作りにも誰かが知恵を絞り工夫していたこと。歳月を経るにつれ、保護者や地域の人たちに心を開いて話していただくか、信じて頼り合う関係性をつくるために努力し続けたのだろうか。安易な考えで、私たちは制度の枠にはまった取り組みに流されていたのではと自問しました。
利用者も職員も20歳の齢を重ね、法人設立に尽力された保護者は75歳前後に。「健康・介護・孤立・コロナ禍・災害」と、みんなが同じ課題を抱えています。共に試練を乗り越えるために私たちの原点を問い直し、さらに膝を交えて話ができる関係性を築いていきたいと思ひます。

夢工房は、「新しいカタチ」を模索中。「仲間」づくりへ、再出発です。

夢工房は誕生から35年、「企業の中で一緒に働く」、この道を拓くことができました。そして今、コロナ禍後を見ずえて「新しいカタチ」へ再出発。企業や地域の人、学生たちと「仲間」になって次の時代を切り拓きたい。

夢工房 管理者 山本 真理子

2020年6月、夢工房は有難いことに、(有)人仁様の製造業務を請け負い、工房内で作業を開始。クッキー作りやカフェ運営に没頭していた日常から激変しました。やっと慣れてきた一年後、同社の意向で新設された工場「セントラルキッチン」に作業場を移動。7月は度々の豪雨に見舞われたため、安全を考えて利用者や職員はキッチン業務を休んだのですが、企業側は通常営業です。大変な迷惑をかける中、企業経営の厳しさ、すさまじい働きぶりに脱帽の日々でした。利用者も同様です。製造量もスピードも半端ではない業務なのに、工房内よりもキッチン勤務を希望されるのです。「キッチンのスタッフさんとの仕事も楽しい。ワンランク上の作業をしたい。高い工賃をもらえる」と。企業の中で一緒に働くこと、その出会いが利用者の働く力をこうも高めるのだと実感しました。

夢工房の商品には、35年間ロングセラーの夢クッキーがあります。一昔前は障がい児者の保護者や小中学校教員、久留米大学の先生など大勢の方々が、「支援者」という言葉を越えて「障がいのある人」を「仲間(メンバー)」と呼び、「共生社会」とめいめいの夢の実現に向けて菓子販売に携わったそうです。同時に、多くの市民が実行委員になって「夢気球コンサート」を20年間開催、人的ネットワークを駆使して教員や児童生徒、その家族らを巻き込み、市内にノーマライゼーションの風を起こしました。

私たちは、その市民福祉活動の歴史に学び立ち戻ろうと、15年を経ての復活コンサートを来年に計画しています。準備を進めることで多様な人々が関わり、それぞれにつながる力や生き甲斐が芽生え、そして障がい者が排除されない社会を共に創れたらと思います。企業や地域の皆さん、学生を大勢巻き込み、巻き込まれてこの時代を生き抜く「仲間」として歩いていきたいと思ひます。

※…障がい者が住みなれた地域社会で当たり前の暮らしが保障されるべきという理念

夢工房

生活介護・就労継続支援B型

共同作業所として1988年に開所し、2007年に当法人と合併。クッキーの製造販売・厨房内調理業務・加工品づくり・施設外就労

「セントラルキッチン」スタッフの方々と楽しく作業しています。



夢気球バンド3名の皆さん。

「ポレポレ祭り」出演の録画風景です。後ろで利用者の皆さんが手話をしています。



人参の皮むきをする真澄さん。



毎日、80kgの大根おろし作り。

「Leo」と「ぷらっと」が織りなす物語 **その②**

7月、一般社団法人「ぷらっとどっと」を設立。 「育ち合う」「補い合う」、そして「安心」を創る。

「出会いの場Leo(児童発達支援)」に併設された「ぷらっと・荘島」。

(一社)ぷらっとどっとを設立し、4チームが活動中です。

街の中にぷらっと気軽に立ち寄れて、フラットな関係が生まれる「どっと(.)=拠点」を創っていきいたい。

「ぷらっと寺子屋(以下・寺子屋)」は、「子どもも大人も育つ地域づくり」を実践しています。

一般社団法人ぷらっとどっと 職員 秋満 美沙子

「寺子屋」活動のきっかけは7月中旬でした。

「勤めがあるものから、夏休みの間、子どもの預け先を見つけないのです。困っています」

ひとり親家庭の方が夏休み直前にして、学童保育所が利用できないと切羽詰まった状況でした。他にも同様の事情を抱える人がいるとの情報も入り、待機児童を地域で見守ることができないかと。学童保育所の拡大をあえて市に要望せず、「ぷらっと・荘島」の一室で自ら運営することで、「子どもも大人も育つ地域づくり」を実践するチャンスと捉えました。そこで、主任児童民生委員の合原さんに相談して地域の方々と話し合い、チーム「寺子屋」を結成。7月20日の終業式から活動を始めました。



靴箱作り

「Leoの子どもたちに使ってほしい!!」と熱心に工作。



午後の「ぷらっと・荘島」。小学生が「ただいま!」と言って、ランドセルを下ろします。1年生から5年生までの子どもたちです。「お帰りなさい」「おやつは?」「宿題をしたら食べようね」。彼らの帰りを待ち、チームで見守るのは視覚障害(弱視)のある長谷部さんや子育て経験者の女性、元教員の皆さんです。遊びに来た大学生がその輪に入ることもあります。子どもたちにとって、下校後のそこは、手作りのおやつがある、宿題をみてくれるといった温かくて賑やかな家庭。反面、学年も生活環境も異なるのですから喧嘩したり叱られたり、生きる力を養う場でもあります。また、表面上は元気に見えても踏み込めば課題が見え、ゲームやYouTubeに慣れ親しんだ世代。どう寄り添えばと大人も成長を迫られています。

このように育ち合ったり補い合ったりできる「どっと(拠点)」が、街の中にもっと必要です。「寺子屋」の取組みは困りごとを抱える人を前にしての第1段階目。今後もひとつ、またひとつ自分たちでセーフティネットを張り続け、「見えない財産=安心」を築いていきたいと思います。



ぷらっと寺子屋
子どもも大人も混ざり合い、
多様な体験をしています。

トランプ遊び

勉強だけでなく、
工作や公園遊びなども。
帰宅の際は全員で
部屋の掃除をします。

茶道体験



地域打ち合わせ
チーム
「寺子屋」

初顔合わせでしたが、
「とにかく夏休み、
週2回やろう」と。

現在、4チームが活動中!

- ぷらっと寺子屋
- ダイバーシティ就労
- 街なかリビング
- 自主防災

※当法人は公益事業の一環として、「ぷらっとどっと」の活動に参画しています。

(一社)ほんによかね会 「地域食堂」と「直売所」担い手誕生物語 **その②**

私の未来に備える。 まずは「人生の先輩」、そして「仲間」から学ぶこと。

JAくるめ安武農産物直売所「そらまめ」は、農作物販売や地域食堂などを展開。

当法人は公益事業の一環として、その活動に参画しています。

運営の担い手は、障がい者や高齢者、子育て中のママパパ、若手農業者など多彩な顔ぶれ。

生きた勉強の場です。

出会いの場ポレポレ 管理者 小川 真太郎

私は地域食堂の運営担当になって約1年です。担い手である高齢者の皆さんは活力にあふれて、とても元気。膝が痛いと言いつつも毎日精一杯働いておられます。その一人、三原圭子さん(86歳)は「出会いの場ポレポレ」のご近所さんで、胃全摘術後も地域食堂の堂々たる指南役です。「地域食堂は私の生き甲斐」と語り、客人それぞれに「お茶を飲んでいったら?これ食べてみて」と誘っての丁寧なおもてなし、その姿勢には頭が下がります。

そして老若男女の仲間たち。木曜夕飯担当の「男の地域食堂」は、若手や六十路の方々が新規献立の開拓に次々と挑戦し、直売所を運営する有志の人も開店日の土曜は早朝5時に仕入れた農作物や加工品を完売しようと奮闘。地域の拠点となった場所を盛り上げたいと、誰もががむしゃらに取り組んでいます。まさに生きた勉強の場です。私には皆さんの姿が「目に見えない財産」、つまり未来への「備え」に思っています。

地域食堂

先輩の皆さん
(右)三原さん



今なお世界はパンデミックの渦中にあり、災害多発の時代。自分が老いたときはどうか、これから歩む人生は容易くないと思いますし、若い世代のみんなが不安を抱いているでしょう。しかし、直売所の現場で障がい者や職員と共に汗を流す私を評して、誰彼が「水を得た魚のようだ」と。そうなのです。彼らとならば、彼らに倣って努力すれば生き抜ける。日々そう実感するのです。

「月曜の地域食堂を手伝ってくれませんか。料理上手のベテランから大鍋料理を教えてくださいませんか」

私は料理好きの人に会う度、こう声をかけるようになりました。地域の担い手をもう一人、また一人と増やし、仲間づくりの結果を出していきたい。そうすれば、どんな時代を迎えようと寄り添ったり助け合ったりして、苦難を乗り越えていけると信じています。

地域食堂

子育て中のママたち



直売所

先輩の皆さん



※当法人は公益事業の一環として、「ほんによかね会」の活動に参画しています。



JAくるめ安武農産物直売所
「所らまめ」(安武町)

(一社)ほんによかね会が運営。2017年開所。
地域活性化を目指す住民らが活動しています。